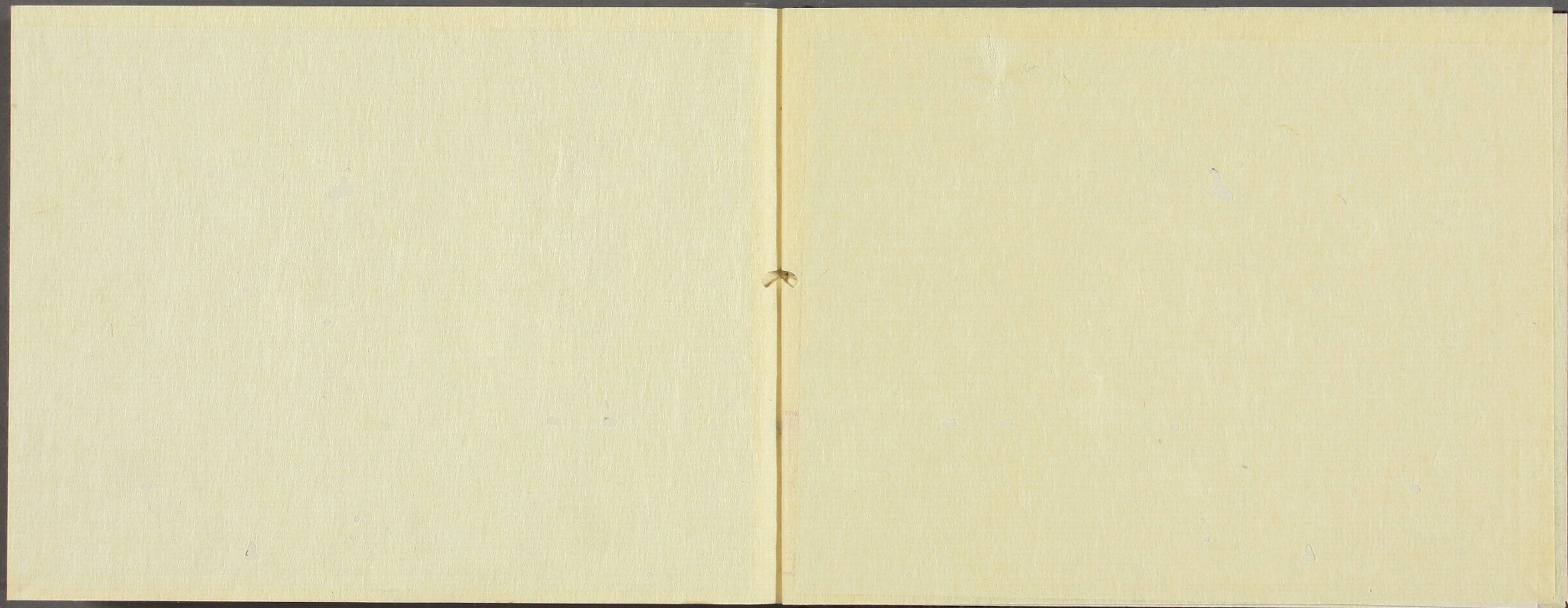




世

五  
陽  
文  
庫







乙女

卷名以詞并号号之  
五節乃有あり段二号也  
と云ふるは源氏世二方月  
十廿四方乃十月廿二乃  
事有はれは十年と云ふ  
とありて正月よりと云  
不見歟



とくもつてー おほきつて  
宮内省に 為雲女院一園と  
諫園ありて園母は諫園持院を  
二姫より齊明天皇の母なりし位  
に即ち人の常世母と稱す也  
世中色ありしゆり 除服を  
吉服ありたるも也諫園三月  
ゆきまほし月夜にありし  
ころと久世に 四月更衣  
は川にありし 賀正祭也

大なるなりしなり

四月天氣和且清といふ  
四月の清和の天といふ  
前齋院は 檀齋院也  
はりの急なりしとれといふ  
ゆきまほし也

おほきつて 齋院の古也

桃園乃庭の桂也

大殿よりなりしなり

齋院の終乃日也 賀正







除服とはんくを辨よ  
おれもるふたはさ  
らんともあるも除服とは  
んく

ひつらつて

服者乃用紙也

夏はさるふ 荒乃紙

つらつて

おり乃あされ 時節感  
也 時節は感して紙返り

あは

あらつて

除服の以後のさるふ  
紙きつては 今も  
さるふ 月りのさるふ  
て 今日除服あるよ  
いひのさるふ ねん 山橋  
まのさるふ ねん ねん  
乃也 七よさるふ  
をさるふ ねん ねん



世ふそりち物々をみる  
或玩弄死に世中除服せし  
みしれをいふ年月程も  
くうはうして去年打割乃  
とわうううううううう  
世折子ちりしもいふくわ  
はんう死に世後のこころ  
る家くと 又乃調也や  
つけみうううううう  
おせよくえん世ととも  
也

世少くち世うらたふら

吉服と改く日乃る也  
世少くち世し程も  
はと世字前乃くふいと云  
よをううううううう  
かくちうううううう  
んちうううううう  
の世乃事とあるも  
院ふくうううう  
世院也院とあるも



南の地事なれどもさう  
も事柄也

たけやうききし記さう

風流めらうさう艶色なま

ももあさうさう也

さうさうし 新院まうし

しはさうさう事しなま

まはさうと宣旨乃思也

いづい 宣旨乃思を推察

しな事しな也

多死人い 源氏本二才

さうさうさうさうさうに

おまなしおなまとおまなま

又さうさうさうさうさう

さうさうさう

こさうさうも 新院と廿五宮

さうさうさうのさう也

さうさうの今さうさう

源氏乃さうさうさうさう

おまもあさうさう父事さうのさ



も存生乃母の事也  
もんよの事なり  
れ也

新院の事也

えみそりまうりぬ

源氏といふ事也

松といふ事也

源氏も此の事也

新院の事也

一と云ふ事也

も此の事也

源氏といふ事也

養上存生乃母の事也

ひねといふ事也

かゝる女立官なり

も此の事也

けはる事也 源氏の家

と云ふ事也

と云ふ事也

一と也



はるよりて 幸は新院を  
おとせし百はけうの如く  
今又おわりお終りの昔より  
て終りやぬ也

公つ記ありし 新院の由は  
いふもあはれき事なり

昔よりいふは母なる父に  
情乃こそは物よとされし  
あつかりとていふて年も  
いふもあはれき事なり

宮人七 新院乃人かたし  
源氏(志)くはる如く  
下はふくはれ也

かたし(志)くはる 源氏(志)くはる  
新院の由はとわたりしは  
おはるまうくと見れば  
相しつる也

大なる事なり しみゆ  
あつとる母よりありし  
大なる事なり



夕音也十二才也

云系宮也

大宮乃有之元服あり也

右之御所 養上乃兄弟遠也

口位より一々也

一世乃源氏に口位叙す也

夕音に二世源氏也二世源氏

に五位叙す也然ち夕音

は世の是あり今も此に口位

よりあると世に今も思ふ

源氏七代にあり也

孫王直叙四位事上古定

事也見續日本紀亦不違

具録選叙今日允蔭皇

孫者親王子從四位下注諸親

王者不限有品無品皆是部

令内祿親王不注品階者皆

此例

源興基彈正尹人康親王子

貞觀八年正月七日叙從四



位下 元五位

源博雅 兵部克明親王男

養平四年正月七日叙從

四位下 元五位

親王子直叙四位雅為流別

一世源氏大臣息大略叙爵人

源叶 信大信子 同靜 元大信子

伊涉 源明親王子 志賢 高明子

皆是叙從五位下者也

きつとらるる 雅也

とらゆるるる

不養也 おもひやもさるる也

あさ記しつて殿上より今ぬを

夕暮に重殿上也されい還

昇也

一世源氏の子其庶<sup>中</sup>從五位

下されあけ此袍と看しつて

還昇すすよは冠者の志

乃あさ記しつて看すすよは

二れ意あり五位の庶<sup>中</sup>なりと



いとまは、いふた、叙爵せざるは  
いふ位也、定む、後、殿、寮、式、子  
無、位、職、黄、と、ん、と、り、故、あ  
さ、記、り、殿、上、子、り、と、り、あ  
無、位、黄、純、い、ふ、統、あ、り、物、置  
乃、卷、子、志、く、一、行、り、あ、り、云、位  
た、も、り、乃、純、と、あ、り、記、り、殿  
上、赤、く、も、り、は、り、り、涼、緑、の  
色、に、藍、と、新、安、と、り、て、涼、り  
あ、り、記、り、と、り、い、ふ、り、故

也、是、よ、り、て、之、を、上、の、り  
た、の、調、よ、六、位、右、世、と、い  
り、魯、其、子、よ、い、あ、り、い、ふ、り、也  
い、ふ、り、あ、り、あ、り、い、ふ、り、後  
乃、純、り、還、昇、き、り、と、り、い  
ふ、り、也

い、ふ、り、あ、り、い、ふ、り、大、学、漢、氏  
の、射、面、乃、つ、り、乃、如、也  
き、り、い、ふ、り、漢、氏、の、返、答、也  
た、い、は、り、い、ふ、り、人、の、い、



此の如くに早く昇進  
致しんもはやし事也  
深出たりる程也

大く此る事

尚書大傳曰古帝王必立大  
学小学使<sup>公</sup>卿之太子大史  
之<sup>元</sup>元子士之適子<sup>十</sup>有三年  
始入小学見小節自踐小  
義字年十五入大学知君  
臣之義上下也<sup>位</sup>

貞觀格曰大学者尚才之處  
養賢之地也天下之後咸來  
海内之英並萃游友之徒  
元非公相之子楊馬之輩出  
自實素素之門高才未必貴  
種未必高尤且史王者用人  
唯才是貴朝為斷養  
夕登公卿

蓋相子息入大学察之例

西三条大臣良相  
同院大臣  
也嗣子



後賢

と云はれし 字同あつたが  
けふしつ けふしつ けふしつ  
にちんきつ 昇進にや  
るるしつ也

みゆしつ 源出よし也

きつしつ 凡人の教も

るるしつ けふしつ 及ん

る事おほし也

かきしつ 文才也

ねしつ 筆筆よし也

いしつ

とらふにやに 賢子も

愚父よし事なし也

見過於師減師半徳と

そしつ 父子乃道もあ

るるしつ

ゆしつ 次也

いしつ 也

きしつ 家の子也



世にふるまふはあはれなる也  
位にふるまふは家の子に實位  
のふるまふは國の子にふるま  
あるふるまふ也  
ふるまふはふるまふ也  
下はふるまふはふるまふ也  
ふるまふはふるまふ也  
後する也  
ふるまふはふるまふ也

時代ふるまふ権威あり  
親ふるまふはふるまふ也  
ふるまふ也  
ふるまふはふるまふ也  
ふるまふはふるまふ也  
和國乃用ふるまふ也  
ふるまふ也天下政府ふるま  
ふるまふはふるまふ也



所ありて

尚命に六位に不足する  
抑されども授業を早  
敷ありと也

所ありて

終よに政道輔佐の片に  
ありしも早ふ也  
竹とちりしるのみち

源氏乃薨去乃後しう  
るはよるうたを

せまわらる大くおん

<sup>中</sup>をゆりたるの窮者也除同

口亦乃籍子内豊窮者  
と云まらるるの大学  
乃元より幸久く

昇進するもをぬら也

<sup>城</sup>をよりたる大学の元

窮屈するも所なり  
記すにたるも学司より  
其事なるも窮屈するも



けはくも七 大宮の西返る也  
源氏乃作しつゝをさす也  
これちおなすも

大宮嫡男以申す也

ちあふてく あふてくも  
もすはる也

いふはるもすもり也

つゝのちあふも

加階一のちあふも  
をも也 從五位下より從五位上

いふはるも加階も從上  
よむる下しつゝ加階と  
いふはるも又あふ

源氏の朝也 從五位上の元服  
いふはるも給ふもすも  
も也 我も子細もすも  
いふはるもすも也  
いふはるもすもは  
愛もすも也



かゝるも、あつて

学文なるもの、おのゝ理を  
とつて、いふは、いふ、いふ、  
よれ、いふ、いふ、いふ、

あま、いふ、いふ、

字也、儒者、いふ、いふ、いふ、  
あつ、いふ、文章、院、いふ、堂、監  
と、いふ、者、いふ、いふ、いふ、  
文、屋、康、秀、と、文、琳、と、いふ、  
は、お、也

<sup>下</sup>礼記曰、已冠而字之、成人之道  
也、今、東、六、位、冠、者、其、姓、字、  
、具、メ、江、二、橋、宣、源、榮、也、  
曹司、いふ、いふ、也

水原抄、是、いふ、院、ノ、初、系、ノ、  
いふ、書、書、学、生、カ、入、学、ノ、名、簿、  
ノ、秀、才、随、才、メ、系、ノ、いふ、堂、監、  
事、下、ス、カ、タ、キ、也

<sup>中</sup>学生、入、学、乃、いふ、文、章、院、乃、  
堂、監、ノ、事、下、ス、カ、タ、キ、字







この窮一は儒者とは  
ちんくく 理運する也  
すくく 志す也

とくく 年たすも也  
成も物とすも也  
記年たすも也  
言人を志すも也  
とくく 也

い 純子也 酌とす也  
すくく 也 帝人

とくく 大徳也  
帝乃衆命の也  
とくく 也  
おろく 也

貴概乃先例も超過す  
る也 色代する也

不ほく 也  
とくく 也

哲士も此朝也 也  
九頃下ある 也 甚非常



に作りぬ也。いふと垣エニ  
下也。陳時急大養をいふも  
あり人教乃外此人也。今  
の相伴するといふお也。あは  
に強食也。畢竟の心は此  
儒者なるといふ早なる者  
は知らぬはるんが事と  
いふて大やけよつておぬ  
は。只今大おや民の徳の人  
乃儒業ノ者のいふも取

給にゆるさふなる也。却る  
をこころより非常に  
作りぬ也。いふも作りぬ  
といふ厭不也。益をいふて  
敵ノ人び相とる人上首の  
前酒をうけのいふ又酒と  
入上首乃人子とけり也。  
上首の人のいふ又酒と  
いふて次人へ授くる也。  
いふはいふいふいぬは



まことけぬ調ふはまきん  
わづらひぬ也

又さういふ 儒者とも

しる朝也 凡俗の手也

鳴高

あつたふちやうやいふが

はなはらふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

され三夜 又号大交

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ

あつたふちやうやいふ



ついでに

夕暮に大学ありては

事と奇特は是なり也

あやむるもはるも 無恥なり

とてはもはる也

あやむるもはるも 揚子也

いふもはる也

あやむるもはるも

猿也 并猿系はあやむ

あやむるもはるも入る

事ともはるなりしは

或流存よりしは

しくもはる事なり

ともはるもはるなり

はるもはるなり也

もはるもはるなり

怪也 中あはるもはる

はるもはるなり也

也はるもはる也

はるもはるなり







守節也

けをほい人

情士

才人 秀也

事

おのり

元

えを乃人

釋奠乃ほも儒業也

とる人の字類也

絶句也

興ある節の 翰林の人

出題す也 韵の字切韻と

て行字びりて 韵とす

はほも又 韻中子取 韵

とるて 韻の五文字の中 平

音の字とす

事もあり 又 行類とす 作

者の字は 留をて

も

えり 此のよ 日月の如也

講師也 詩を



よきあはれ也

おほしからるるはつを

左中并此事をいつる旨也

尚ほ文字乃らるるもあはれ

昔年の威勢もある也

かききり紙 今夜の詩

乃らるるもびりもあはれ也

はよのりもあはれ

東流孫康の家貧より

油をとりゆるる堂書とあはれ

此き源氏の君乃らるる世界

乃らるるはよきあはれ也

此書はつらみもあはれ也

学問の旨もあはれ也

也校の書に定乃らるる對

してあはれ也

あはれもあはれ 馴乃らる也

おほしからるる 在るる詩也

いほれもあはれ也

女乃らるる 乃らる也



まうくとりあふ 入学也

東脩ノ礼也

中今日允学生在学各以長

幼為序初入学皆行東脩

之礼於其師各布一端

寛平八年十月十日齊世

親王入学當日早朝召文章

博士紀長谷雄御自持名簿

賜也長谷雄并拜親王奉堂

二世源氏歴儒業例

源任行

從四位上氏大補兼明教王  
男苑山院侍續

同後賢

正二位大納言 氏了  
左大臣子明男

後賢例を相叶ふ

又執政臣歴儒官例

忠仁公

天長九年閏三月甲午任  
大學少輔從五位下

やうしこの院のうらひ 東院也

文章院ノ中ニ有東西曹司

模範ん

よもひらうのし 予子地之

はれすけいひ夕音ハ大文 三条云



よきつれをたちこのや  
うに愛しぬくはやくそ  
の学問を師にたれく  
しぬくも  
ヒトツキ  
一月にふたつ

大宮への水え廻り息うま  
今日九学生先讀文通熟  
就後講義毎旬放三日之  
休假

殿まつくもたえおとす

夕暮也涼出はし〜夕暮也  
大つれ人〜夕暮也  
一記をうらぬは〜学問  
よきつれをたちこのや  
うに愛しぬくはやくそ

四五月

素試

明徳道の学士四書六經を  
本とし紀傳道の儒士は  
貞觀政要史記文選本を



学しりて博學と奉とせり  
はは分持學ありと考とせり故  
るなり

公に侍とぬ 先習礼一知也  
中是は寮試う字法をん  
とそ先習礼一知ふ事と  
いり学生とて大学寮に  
試ひり寮試といふ試より  
史記よりよりしる也とく  
よみ知るる人を擬文章生

に補と擬進士ともいふ也  
凡儒業試つといひる人の兄弟  
道をとらふといふ先補大学生  
灯燭料とぬるなりて九年の  
同堂書此所といふとるなり功  
試つたりて大学寮より試  
らる史記をよみしりて知  
同ぬ其系中に三系も通する  
試及弟とも則文章得業生  
に補とゆふは據樟七年と



いひてをよむ本は七年に於  
て用ゝ立にきとて七年乃  
習学同くしては武部有  
りて課試はよく先詩賦  
を作らばは業れみとく者  
これより秀才進士の二種を  
秀才といふ方略といふ方略は  
其端乃大事といふ也献  
策乃は問題に答へてく  
事とてはるる大事也進士

其の時考策といふ合と云  
書にみえたり今の世は史  
章得業生二人より秀才乃  
とありとてはるる給料を  
給く習学同一とて人も其に  
方略乃直に記してはるる  
或は有るる課試をくく  
也又入学者乃衆中より其  
ありとては博士を帯すは  
大学寮より試て又史記を



とすしむ及第乃人と擬  
文章せし補を以て人  
是試或者之試て詩若  
賦とらるしむ及第人  
以文章生に補を以て進  
士としり或は前を物  
題とすはれり試らるる  
あり文章生に補して後  
文は方略の宜きと蒙て  
課試をとる事もあり

進士には考策ありとすも  
方略乃宜きと蒙りて方  
略乃試也文章生の方略  
試らるりて献策する事  
は尚職乃中と又外國に縁  
よりりしむ試と散位のは  
とふりしむ也京官に任  
しむに献策を以てる事  
也或文章生はし得業  
生に將て課試乃例也



之或文章生いしはりて  
方略の試子及る事も  
あり源氏夕魯れ其い合は  
例也朱雀院乃行幸の試子  
西条試子詩とつりて及  
弟しゆく進士と成て也  
之は侍の官子何れ也  
寮試作法

寮頭以下各一負博士以下  
各一負参看試廳出貢奉

交名亦博士加署渡寮頭  
見平下乞以下以冊  
匣三合置試衆座前又以  
讀書等置頭博士秀才  
謂之試并試衆等最次才  
博士  
召試衆抱卷出場門下  
乞云版亦試衆指而就版乞  
又作云敷后試衆指於敷  
居下脱皆着衣置帙並頭  
作云冊衆唯而探冊三吏之間  
今日讀誦



膝行置試博士前試博士對  
寮頭云史記乃卷之三の卷  
世家乃上快乃五乃卷下快乃  
一乃卷傳乃快乃七乃卷頭作  
云令讀日試衆各披快抱  
卷引音讀之頭作云古  
末天博士對頭云文得各  
頭云書注也寮掌捧簡  
稱注由年試衆退出堂監  
於榜門外作堂科須有事

とる也乃之何し一記

即之し不審すつと不  
也とるをハ博士也師とるを

者乃同也

かひよまきり。あま

こまへんていんていよ

んぬ也

ほりりるわん

説くあはれも只是れなる

よんをいひてを事



25

子年



新







えいぞわく 西師は内訌也  
すをさうそ 世よあこそと  
すねくーら也

正後くーら亦ありて

源氏の足知所ありて

師にこそしる也

師てはさ記 多き也

大くはすけり也

素誠なり也

まじりもひま 今学れ門也

大ざれ君 尉者君ヲ尊也

つふはしるも

前乃朝々大官は太おる也

あさりいさしるも

あそはしるも

けりともあはしるも

しるも

えりも

るも

我のすゑと 今日九学生



在学者各以長幼爲序  
去幼以牙着爲すれ也  
こもまもまのありの  
制心しくも也  
すもおくも  
作法も夕暮の<sup>膝</sup>も  
れぬ也  
いとおほくた  
只今漢氏の<sup>出典</sup>行も  
吾れ入学の<sup>漢</sup>も

丁は<sup>何</sup>も  
こもまもまのありの  
あると<sup>上</sup>申也  
藤氏子の<sup>勸学</sup>漢氏の  
将学院<sup>植</sup>武の<sup>学</sup>館院  
まもまもまの<sup>学</sup>同  
何れ也  
文人<sup>ま</sup>も  
文人の<sup>文章</sup>生さ<sup>所</sup>に<sup>擬</sup>  
文章<sup>生</sup>と<sup>文章</sup>に<sup>擬</sup>



すも也或擬進士也

史記五條乃申す云條此  
に通ずる擬文章生也

補すも也

進士及中<sup>秘</sup>也頭名もくも

しくもある大教とあ

けしよも二也方畧名

宜旨記すもあ人の卒の

文章生也進士もく國

も進すもと擬文章生

と云也文人もあるとは

此事也又昔に擬文章生

此以後行幸はは以前の試

あも也

ともてし 師も中子也

よのも 漢氏もくも

作文も也

くもき記し とも

く記もくもくもあ

くもき記し とも



ありし也

何字也 為皇女院也 梅童  
女御 結姫 とも 苗今 此 けうろ  
みよと 女院 とも あり とも けい  
ら けい とも 源氏 とも けい  
中 あり とも 也

源氏 あり とも けい 必 源氏 とも  
けい とも けい とも 天子 乃 子孫 けい  
皆 源氏 也

丁 後 朱雀 院 けい 陽明 門 院

三系院 中宮 嫫子 教康 親 とも 兩  
皇女 女

所 共 為 源氏 春日 大明 神

有 御 祈 敬 とも 祈 とも 大神 宮 有

以 詔 宣 事 此 子 隨 為 寬 仁

以後 子 聊 不 洞 也 卒 桓 武

以後 天下 ノ 國 母 多 大 織 冠

御 末 也 忠 仁 公 以 來 藤 氏 臣

皆 外 家 ト メ 必 執 政 とも 也

弘 徽 殿 乃 あり とも あり とも あり

に 弘 徽 殿 あり とも あり とも あり



所ある事と弘徽殿の  
乃人の早急柄つ弘徽殿  
了此女々各親つてよと  
てよはる也

帝の女 崇仁女親王也  
此女は 薄雲女院乃  
此兄弟を今上乃此等  
也仍まてわいよる也

王女御

王女御例

朱雀院皇女昌子内親王  
冷泉院 世号王女御  
惠子内親王 文徳 下略之  
とるは

薄雲女院と云ふは  
亦る女方けい也  
は、ま、の 女院の  
一、は、の、  
宮、の、内、の、  
よ、る、



之人立所あつても也  
此さいしひの 故母也是所  
ハ前坊而位子即始也立所  
もあつても不幸なれん  
給一也子好子いふて此  
所宮只今立所あつても也  
以是めり弘徽殿王女御  
ふれれ立所あつても  
ある中子梅臺乃立所あつ  
て幸すれども之れ

行々太政大臣

皇子太政大臣例

大友皇子 天智皇子 天智天皇

十年始任太政大臣

高市親王 天武皇子 持統

天智四年任太政大臣

内大臣轉太政大臣例

忠親公兼通 天延二二任

元内大臣 但園白也是すか後

連綿也



去内大尺子

内大尺執改例

堀河同白 景通 天禄三年

十月廿七日内覧同十一月

廿七内大尺

中園白 通隆 永祿元年

二月廿三日内有尺二年五

月園白

師内大尺 何爾云 正暦五年

八月廿四日内大尺長徳元年

三月八日内覧

めん子了記

掩韻子まけ如事林卷

にあましるこりお子あまけ

如へとも字文紙をよ

如しをねえ大おけよ

りこりわし

如子とも十五人 系同子

乃もるお十一人

おとし



源氏よかきひ也

女に女師 弘徽殿也

いふことあり 西井乃也

いふことあり

西のふくむ女に孫也今に

按察大納言に家になりけり

所いする 按察大納言の子

とも也

うねよかきひ ちかきひの

子もいふことあり

はまきりとも也

大宮に也 祖母女に言は

にいされ也

大七の言 夕音也

ひらりり 夕音も西井の

所も大宮の言えり也

いされ也

いされ也

いされ也

いされ也 夕音の言



張みちり也

けさちりふい父おしこを  
とけいふおしはせといふ  
さねははゆいともちり  
よめ也

女君ころし 十四支也

おしこころし 十二支也

おしちりく 夕音あめの  
乃ち乃ちおしちり  
ちちちちち也

よきよきよきは

夕音あめおしちり  
也品今字同しり別  
にちちちちちちち  
ちちち

みちりはは 是七支也

ちちちち乃ちちち  
ち改大片のちち乃ち大  
新位乃ち大卿也

年下ふちちあはちち  
ち



母屋乃答をまじり  
萩のうそ風も

秋に程々さくらさくらとあな  
萩のうそ風萩のうそ風

ひまわり 是より内太  
銅也 丁うたの物持は

さもしはら女のちんぷう  
ありさくけさるすまじ

おちまゝ  
ちよみこいれのきんぐ

行くはまもたもたし

とよしお供もくもく

いぬくも  
おはらおのり

おろよおのり

前大とらふふもちう  
くもよもあも

うたあよあも

あよちうり  
まよあも

あよあもあもあも



より年つる人れ何れ  
てさうよ引く人れ何れ  
れ何れよ何れ

合意あるもていさよよに  
とせし山田なよも何れ独  
り何れつりよよに何れい  
るもよ也

ちよ何れよも 柱也註記也  
よれに柱<sup>チ</sup>等よれに柱也<sup>コトチ</sup>  
た乃よよ何れよもよもよ

はよいよもよもよも

大宮乃朝也 明もよの也  
たの世よ 源也の世もよ  
つよよもよもよもよも  
もよ也

かよよもよもよもよも  
はよいよもよもよもよも  
よもよもよもよもよも  
よもよもよもよもよも  
よもよもよもよもよも



西表灌河乃年合後成口  
判乃詞よともなるいなり  
とる幸ひ日々あふり  
女はさし 西表の詞也  
守りうはあま

怪しうにあれ何をも  
人よにおもる海ととれ  
さる也

おもぬ人よ 梅童女  
ととれさる也

よるにさるよ 西井也

弘徽殿乃梅童よととれさ  
れおくるよととれさる  
早よはれにさるよととれ

東宮れ 朱雀院乃白子  
後よ今よととれさる也

さるい 明皇の女乃  
也 明石中宮也

たいますい 退しむる  
きさるいさるさる



以明の上を以て姫君を尊と  
しつゝ御より可なり御  
みありと人ありと  
〜〜〜也

ある所也 大宮の返答也  
この家も 忠仁公の末裔  
系代はるるをあらわす  
す〜〜〜也

女御乃心事也

弘徽殿入内よりして禮文

致仕移政乃わらうとら  
祈〜〜〜也

仁をもつて 故移政也

〜〜〜私徽殿を越

て梅壺主名乃ちある

〜物と大宮の所也

〜〜〜

大宮とあるす〜源氏

〜〜〜也

〜〜 稚字也



らんきう 繁上すゝるふんきう  
とくねんきう

管たはる也取上曲也

九をさうり十をまゆるとく

ともたよゆる也九にともれ

物り十をさすらむとゆる

也はともりゆるとくははは

ともり

里とねんきうの 秋なるり

おりにあふ調子也うねん

いふきう 龍也

日本より律とくの高角

乃古にさうりたるもあふ

也唐ノ律書よはははは

おりにあふ調子也うねん

平調なるり

内乃らちさうりすま

豪士賦ハ齊王問ト云人功

ほさうりさうり賦也

文選ニ序さうり賦載り



豪士賦序 陸士衡

落葉俊微風以隨而凡之  
力蓋寡孟嘗遭雍周而  
函琴之感以味何者欲預之  
業之所假假風將墜之泣  
不足繁哀響也是故荀時  
啓於天理盡於民庸夫可  
以濟聖賢之功非肯不以定  
烈士之業言過時也故曰才不  
半古而功已倍之蓋得之於

時勢

志ハ庸夫とて一也若も  
賢聖此者あり又斗肯せず  
一まらざる者もあつ用  
らる事も又才学ノ古ハ人  
ノ半内れも及も所ハ今も切  
者ト云々わらる人のあも其  
故ハ此運ちるしと云ハ也只  
今内存心モ今源氏ノ勢  
子天下よりわねえ我むすあ



乃立ぬちをよむに母は  
らほりて早ね公あつまよ  
りてけり伏誦しぬる人  
まむ乃ねるふねと

<sup>中</sup>雍門周の琴を弾と今れ  
大臣の和琴びりおる故  
琴はねるふねと  
まふまふすえはらういとの  
らぬとよにいらせぬの  
まふまふすえはらういとの

のやと思よまそく地ゆる心  
詞めく入るおりろくまこ  
えゆり

雍門周の事ハ詭苑ニ出たり  
みねさゆり 大宮也内府  
もも娘君はもたまはらう  
とおほりやま也 二氣とも  
あつちまもくあつち

あつちまもくあつち  
あつちまもくあつち  
あつちまもくあつち



みまーん

姫君と申すは  
おさくおん

口府夕音入乃詞也

あーん 何れか

勤学を

はるのた

大学は

まもれ給命

を内長

繪命

あ

あ

人

あ

と源氏

か

源氏

あ

あ、他の



あつた事也を記すこと  
とてくわぬ也

あつた事也を記すこと  
る事はあつた也

あつた事也を記すこと

記柏子とはあつた栲扇を

とうらぬことなり

中節二ともなり柏子なり

うらぬ也なりあつた御遊

なりあつた事也を記すこと

人乃當びたりて新當と打

あつた事也を記すこと

とて又當りたりてあつた事

はあつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと

あつた事也を記すこと



伊馬業品 更衣

衣カ入カまカじカわカるカ。衣カぬカにカ神カ系カ  
之カのカ系カ系カ。既カすカしカとカ業カ  
冠カ者カのカ思カふカさカとカあカ〜  
衣カぬカしカ事カ比カ思カふカとカ大カ  
衣カぬカ事カ前カよりカ下カ衣カぬカ衣カ入カ  
のカ事カ〜カ〜カ〜カ也カ  
大カ股カとカ衣カぬカ 係カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ

衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
〜カ〜カ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
大カ官カ衣カ御カ方カ 衣カ再カ衣カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ

衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ  
衣カぬカ衣カぬカ〜カ〜カ〜カ也カ



しこりしきん

内府乃侍しり如く也

おれし事

すくはしき事也おれし事

子としりしり

擇子莫如父擇臣莫如

君左傳

知臣莫如君知子莫如父日書紀

事也

侍しりしり

如くも也

あしり

あしり

まし也

大さし君乃おしり

くしりあしり内府と

しりしり

としり也

後言也

しりしり内府

人しり也



やあそみらよき...  
てはえふよもとのぬき大さ  
頭乃こら...  
あ...  
夕暮とやあ乃存。のあえ

いあ...  
あ...  
秋好立船...  
...  
春文...  
...

春文...  
...

...  
...

...  
...

...

...

...

...

...

...







いめ。れが。随分考へも  
何んといふれども也

よゝめものいふよ

雲井宿ゆりうりいん

ゆり事出来たり也

うもおひふまう

今は行くと會着ると思

はると腹立へるとけ

やうさゆよのゆり調也

ふむはう。大宮乃

引つらひゆりるゆりめ

色も変す也肝をつゆ

すゆいれも大いなるゆ

ゆりうる。大宮の朝也

ゆりよよいゆりれも

大宮ゆりゆりゆり

ゆりゆりゆり也

きりゆりゆりゆり

内府の調也

みゆり。弦白内府の



雲井屋のうとくも也  
かひがよとつれ

先門府のうとくある子も  
お事成之あるしぬか也

さあも人と 此女は太宮

乃志をそねむも思ふ也

あやかしも也

先は夕暮のうとくも也

乃志をそねむも思ふ也

あやかしも、あやかしも也

あふもこの世 何れもな

ま物さるとゆつとふは

あえくしぬかす也

うら人のうとくも

夕暮れは夕夕も也

ねもし 深成と可成は思

ねもし也

何れもし 何れもし

ももし 母もし也

嫁娶乃儀式もあつた也



おはる人との

雨井の夕暮れにふゆの

さきさきの松より大宮乃

松のまはりの曲とる松を

うゝ松也

ゆはよもさうゆよめ

大宮也

けよさうゆゆも 大宮松屋

こゝにさあして

大宮のそおもふ松也

みさるまうりさち

は娘君とさう松よめ

公とふ別へ愛さう

くこねもさう松に内附

乃おのりさう松也

伊もつるまはれさう松

よもさう松也

おはる松也

子さう松と孫もさう松

さう松也







一夜はさういふ

一日はあつらん

赤面し悔す

所はうん 内府

又うん 内府詞也

我うん

我子に公をさう

らうん 我の

さういふ 罪也

とてうん

かやうには

私よ云詞也内府

あ

康子内親王 延喜皇女 村上

乃帝の西は弘徳殿

しうしうま九条

志のうん

よはあ

る内院

をうん







うゝまゝに 内太の銅

也 あり乃抄録内太の短

ニ

らびりつて きよむけ法

ありしよらむむらむれ

いあむむむむむむむむ

ふにきむらむむむむむ

何てらむ也

いもむむむむむむむむ

むむむむむむむむむ

記也うむ申しむむむむ

むむむむむむむむむ

うむむ也

大納言のもの 按察右納

言也むむの存るまゝ父也

むむ人のすむらに

女御存るむらむらむら

うらむらむらむら 内太也

何とむむむむむむむむ

うむむむむむむむむむ







何と云ふに比つた音よ  
外にこれと云ふは(Handwritten)  
何と云ふに比つた音よ  
五和の音に比つた音よ  
何と云ふに比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ

何と云ふに比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ  
大宮の音  
大宮の音に比つた音よ











きりふかきとて

逢事即ちさるる也

おとこ 大宮へ下りて

可なりとて也

きりふかきとて 伊井存乃

継母也

大宮に下りて 伊井存乃

むきと棟棟ありとて也

きりふかきとて 五娘に

これれおとこも此翁は

おとこは建ははうにたれ

に常ふありてとて

とて也

おとこは建ははうにたれ

女房も沖ありとて也

おとこは建ははうにたれ

伊井存乃とて

先女御とて

うらむしきもぬれうにたれ



ふしとてはなれりし記しつゝも

まじ也

ふしとてはなれりし記しつゝも ちとてはな

ふしとてはなれりし記しつゝも 志する腋立ある也

ふしとてはなれりし記しつゝも 内衣詞也女衣

ふしとてはなれりし記しつゝも 中衣也

ふしとてはなれりし記しつゝも いれ悉わつて 弘徽殿

ふしとてはなれりし記しつゝも 退出乃生る姫君とて

ふしとてはなれりし記しつゝも 始むるの故也

ふしとてはなれりし記しつゝも 内衣とてはなれりし記しつゝも

ふしとてはなれりし記しつゝも 色しつゝも也夕方其也

ふしとてはなれりし記しつゝも 内府乃心よもつていふ

ふしとてはなれりし記しつゝも 也礼記の詭るとあれも

ふしとてはなれりし記しつゝも 無益也

ふしとてはなれりし記しつゝも 宮いとありしと 大宮也

ふしとてはなれりし記しつゝも ひらひのちれり 養也

ふしとてはなれりし記しつゝも へしとありし 西井存乃

ふしとてはなれりし記しつゝも 事ゆへにありしに

ふしとてはなれりし記しつゝも せぬ事也

ふしとてはなれりし記しつゝも 心よありし 我々の事也







る此袖はしるあ  
よくお乃心知ぬ内衣  
え神より今  
い  
日大長は  
し又  
しあ

こ乃此は志けく一月  
より大宮より

あ  
左女持納言

山下五人内大長は息也

み

大宮は

左東門督持中納言 内府

兄中は大宮は

ふ

内府乃甥也

こ乃君は 夕音也



あつさ記 かくまはる  
とほも今に種なり 一 一 記  
く 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
よ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
心 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
又 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
人 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
位 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

とあつさ記 かくまはる  
く 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
よ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
心 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
又 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
人 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
位 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



井原乃新事とみるは  
し物事とみるはしる也  
うしろしはあや  
いほくすくよらうん  
あむむと云ん  
あむむと云ぬ  
く音乃女のの也  
なる一君と云ん  
事お乃あむとの朝也  
しあむはあむと云ん

丁北存りあれ也  
殿いとさゆ 内存り他  
人よ縁をむすむと乃  
あむも曰ん一あむ  
といひ一あむ  
そむはうん  
大官の朝也いそい發語也  
事お乃君を割一あむ  
いそものむと云ん  
さいおの朝也















いかにすまふ してこれ  
ちまうし 学問ふ人也  
みまはれ

くちまはれ ちまうし ちまうし  
ちまうし ちまうし ちまうし  
ちまうし ちまうし ちまうし  
ちまうし ちまうし ちまうし  
ちまうし ちまうし ちまうし

之四句 殊勝也 景氣  
面白争也 ちまうし ちまうし

あまのりん也

大と小ふいとも ちまうし

一にまうし ちまうし ちまうし

大とのりん 源氏也 源氏から

あまのりん ちまうし ちまうし

ちまうし ちまうし ちまうし

ちまうし ちまうし ちまうし

ちまうし ちまうし ちまうし

分二人 受領分二人あり 受

領二回司する人也 是と内



乃五節と名付侍々  
さよさうらわきく人こ  
いささきし源出は  
けよは伊能をゆるる  
さる也  
ひんうは徳まの  
さうらわのん乃  
舞娘さうらわのん  
乃装束也さうらわ  
ハ曉集乃さうら

さうらわのん  
去年ハ諒園也  
きつりしはさうらわ  
らつらつら也

五節事

本朝月今日五節舞者  
御系天皇 天武之所制也相  
傳曰天皇御吉野宮日暮  
弹琴有興俄余之間前  
之下雲氣忽起疑如高唐



神女髻髻應曲而舞  
獨入天賜他人不見舉袖  
立髮故謂之立節其歌曰  
平度綿度茂邕度綿  
九備須毛不良多万平  
知武度迹摩岐底平  
度綿左備須茂

立節ハ毎年ノ事也本  
今未嫁乃女とし女と  
按察大納言 中井石継

右束の誓 養上乃元才

指中納言兼右束の誓也此  
二人云分乃立節也

之乃立節 之より出さ  
る之し立節は下りし  
故に受領よりさる也  
仍受領のしうは立節も  
云々依為殿上人のし  
立節ハ常此年ハ二人殿上  
受領二人四下也代始は



二卿二人殿上受任三人立不  
也其と受任の合に殿上人  
とてまゝとて上乃立節  
とも也

みまゝとて立節

立節とて立節あり例乃

るは皆下預叙位と別

て乃立節也

殿乃まゝいひる 源氏よ

ふいゝをらるゝ子細あり

事なれども諸所に見

つゝいゝは 推えの心あり

迷惑する也

大納言のつゝ

按察大納言いひすも也

ありし乃いひらむとあり

推えの女也

たゝしゝは 何あゝとあり

うばやうなつゝ人せとあり

おゝいゝ也



ふくむる

まじりてしるすは

しほし、いさや也

ふれ日乃 五節は日乃日

の夕つらよ也

すれしるすは

以後しるすは也

よわ撰出する其分

付く、西目也

此前とすも

ふくむる

うらやも也

いふもら乃 知つら人の

あまたあれも今一人命も

可いもこれ

きしもりし

いふれしるすは撰釋の

志る人らと撰出され

いふ也

大くはる 夕芳也初る



ス〜トモイフ  
ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

用意也

ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

ク〜トモイフ

後子に後さいはれ

いゆす〜トモイフ

セいの〜トモイフ

似〜トモイフ

〜トモイフ

何〜トモイフ

〜トモイフ

ありふ〜トモイフ

豊忌娘ト五命

事ト〜トモイフ



しつふよのさちしつふも也  
神事乃河原のわさ木綿子  
よきくつとさあもつる也  
みくくの神よあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
豊后姫ハ天照古事記也  
天照古事也宮人全ハ天人也  
舞姫と宮人全ハ神女  
すわつとさくくつと也  
同定古事記名帳廿一巻

豊后宮トヨリ信吉内  
アリ惟えハ極淨宮とてあ  
はえつれ女さあはえと  
つる也称名院乃紙  
シメハ標也

みくくの事  
しあひの袖のさしあひの  
あはれあはれあはれあはれ  
久しとあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ



へいみりとも縁あり

えいほをさむけり

只今夕音此えうめ繪て久

しと世まのとも乃ぬんえ

つけるえいりくも也

るふいひりまな

惟えの女乃也

まきまきしうあそん

又は分るるもく人くけ

むすめとほくろりも也

五節ふしとらけり

了殿上五位職直衣也蒙

禁色雜袍之宜旨と或説

被加職事款六位職り

着禁色故也

西宮抄云指貴ハ王者以下

衆人所用也古時有制臣

下不用近代五位以上昇殿

六位皆用之

宇治右府記仁平元年十一



月七日癸丑晴今夕五節  
参内師長未蒙睡直衣之  
宣旨束帯系入似無面目  
仍不系内正案之其節之  
以上古衣衣リ能ク夕暮也  
此頃直衣と籠と入ルリ  
何カと云ルル夕暮古信リ  
直衣と云ルル事ハ別  
此の事ハ云ルル何カと云  
ルト云

と云

おもしろいこと

おもしろいこと 昔のこと

あー 巨也云々

と云ふこと 地也

何と云ふこと

おもしろいこと

つねに云ふこと

昔のこと

と云ふこと 源也



いづの免とまわねり  
ほくしき帝也

まの日のまはし

十月のせむさうし

あせ二あね下のせせけ

りまのくんのせむせは

帝命乃日也

とやあともせむし

ほくしき帝ももくし

あせしきあともせむし

昔は世帝と出でしり我

りし年かあもも

うらあけけしき

年久くと絶あや

おれしき今あ

とけしきほくしき

もあや ちあ子地

ひりしき 世帝の返り

うら世の友とあ

ともあは源氏の世今



糸のしるは事ありきと思  
也古今のわらわらも也下白  
に海はよあしきや一事  
さるる袖よらるるおに  
日くもこそつらも也  
あこよりよしこ

辰日は皆青色と著すは  
小忌も辰日也あつよあつ  
さ紙とよくともあつ  
きるも也

青摺乃紙と書りら蠟紙  
と唐紙の又いふにありら蠟  
より摺おえと立節の  
折節なれば紙のつよあ  
あつにすりて用いた  
中  
舞波乃装束也日赤色  
唐衣宣日青色唐衣辰  
日青摺唐衣赤紐日蔭  
髪骨木也青摺小忌乃る也  
源氏君の又名は辰日



乃のふたふたあまの  
紙より其節君返るる  
きり也

乃のふたふた 草也

今乃のふたふた

まじりてはるる

大納言のふたふた

まじりてはるる

也

乃のふたふた

乃のふたふた

也

乃のふたふた

あまのふたふた

は後神事也

前舞まの京乃は

有後お舞院退出の時

舞の後は是時神事

解除也其節乃舞は

乃後は是はるる



下  
五節前段乃舟子皆後を  
可也何乃後し河邊通  
より後をする事也幸  
崎雖波七激ノ随一也仍  
近江橋付西月寺ノあり  
舞姫以不後有便更平  
舞波ハ五節より曉天  
退出乃後をす也吉  
ハ幸崎龍波カクも下向  
ける代ハ内野ノ事

陰陽寮より馬をけり  
勤仕也七激所

雖波最大河俣 橋付

大崎橋小崎 山城 佐久那谷

幸崎 近江

又渚中七激者河合一條

去西門近東中洲門大炊門

二条末也

子人ありぬと

實子ありあり也



内侍のまじけ 推えの女也  
ほもやいたまふ事 常也  
源乃らも也典侍の事執事  
あへんも也

か乃人の 夕音也宮内人  
せむしよもまじけかいたまふ也  
わらもはむね 夕音の男也  
あま下りも也

あま下りも 雨雲并宿も  
はらもあま下りもあまね

とまも又ひよつらびり  
うらもくう 雨并宿も  
もくも也

せむしよの 舞姫の兄弟  
也才もあまも男子もつら  
せむしよも

はらも 汝也えらもあま  
あま下りも 推えのはらも  
あま下りもに割すもあまも也  
あま下りもに割すもあまも也



みよりしらすやう

六位の女よるはるん

いりけりとも 我心けりて

より日けり以難首者

平織諸社祭りもいりけ

多岐髪とす也や乃字

かそよの字にありいは。

心も也

ちぬり 父も也惟え也

るをれ又 何とさるも也

きりり〜ハ 惟えりて

きりり〜ハ 汝也 了世絶り

多け朝あり竹取お終り

きりり〜ハあり け書り

夕音同奉也

ねほろ〜ハ 面句の字は

ふよわも也

とれりらも也

源げ乃の心もいり

みなり〜ハさるも也







えぬか

かきあひま ねんご

かきすれあ也

人にたむいしや

語代紙所てり

こゝあまらま 人にこ

わらうしんもすあぬを

る紙紙に中井所いし

早もあらねりし也

みむしひてみらしあ

あしねてらにけりし

てにけりし也

いこてらにけり

紙敷甲と漢紙のこも

さういふにむらり

さゆゆふさうして

みく島の浦のさゆゆ

心はさうさうあぬ

濱地六へたれり事

あ乃にたれり事







北から北に 北後夕音  
乃心と奉りて云り  
みよと云はく  
六位乃きくくちら位也  
ちのりし 六位の位也  
みよくくみおおし  
あはれ也  
おぬと云はれ  
夕音也  
くくくくく

雲井存乃也  
北と云はく  
大室朝也夕音と云は  
乃也  
ちのりし 行はく物  
もはく也  
ちのりし 夕音朝也行の  
なむのちも也六位  
すもやまのちも事なる  
ちのりし 祖文指改也



わつそねぬあやふ 源氏は  
実父よりわつそねぬ父と  
おんちちとあつらふ

実母より源氏也

きいのこころ 死後也

あやふしとあら 養上也

夕音の聲あふれちるは

いほく也

ほふとくさく 大い

朝也夕音びとさめしの

かまうちるは

内大也 但源氏に故後

と曰ふも夕音は

源氏びとと

あふらん

内大も 源氏内大也

ついでとちの

くるし心の中

は いとも 源氏母三

才也節今ちる



右段を凡そよく也中右等  
ハ相國の被多しあり  
よりきりり。

元仁天皇寶龜六年二月  
廿七日御楊梅院安殿設  
宴於五位以上既而内廐宴  
進青御馬兵部省進五位  
以上裝馬是白馬始也忠仁公事  
曰託不見未詳之但定治  
園白以彼例覽之然若勿論

白馬者引諸院官之故也  
忠仁公依蒙准三所宣旨  
被覽之歟定治園白同  
之仍係出右段大臣同就准  
三所覽之者也准所事定  
大和文白太和文白和文  
此三子と云々一人准三所  
と云也

執政准三所例  
忠仁公見觀十三四十



昭宣公 元慶六年二一

貞信公 天慶二二七八

忠義公 貞元二三四

東三條用白葉家公 寛和二三三

内侍一死

内乃儀式とらふとある

馬に引子左の臺の以

下供奉するきり

はらふや昔は

も事とらふ

乃此例も程

はらふもあり

乃一死 清也

朱雀院より行幸あり

御託云延喜十八年二月

廿六日己巳是日入六条

院此月彼例と九條

八天曆二年三月九日康保

二年十月廿三日兩度例

殊相叶也



中  
非父子之時行幸上皇宮例  
天長十一年正月二日仁明天皇  
幸淳和院見國史天慶十  
年正月四日村上天皇幸朱  
薙院但母后御同宿謁太孫  
于柏殿見孝部王訖其後夜  
幸此亦龜山院以字文永  
八年五月行幸後深草院以所  
長誦堂之時有沙汰為中門  
下御如朝觀行幸被近奉長

亦例

仙洞乃行幸ハ毎年朝觀  
行幸と云ふあるハ父子此の時  
乃る也されん兄弟と云ふ  
了りぬまのつゝと也但柳乃  
卷に書きたるハ今此みま  
さうしつと云ふは所をい  
と云ふハ然者冷泉院に朱  
薙院の御行幸と云ふ  
んといはるゝハ仙洞の行  
幸



乃事申古よりいさむる  
さるるや

やまゝい、舊く此女流の志也

まゝいさむるの 麴塵也

あゝ色れいさ

保元内宴日有沙汰法持等

用白被着赤色袍之由見

旧託

様下被蒙事由ハ普通也裏

ハ様也ハ情際法意日主上合着

様下被蒙同半臂給或又時

行幸上と云春ハ云着様様

或萌木下被蒙深装束也晴

後ニ諸片着麴塵袍賜

一日之畜色也其時主上合

着赤色ハ袍給又才一人同

着々

漢代曆曰大唐景雲三年

正月廿日内外武官各加階及

天下老人与板授官年九十



已上老緋袍牙笏

西宮記云内宴之日長下皆  
麴麿王上服冲赤色而中  
一上以服同色之袍是又例  
也有雜例之中故貞信云  
並小野宮大長夜之著赤色  
但延喜之同國經大納言  
時之著赤色云

<sup>中</sup>内宴日王上并中一以著  
赤色又殿上賄弓時如此見

西宮抄青色袍乃下懸衣極  
之々或朽糸と着用す云  
かく生十人及中すつら者  
式部のみつゝ 式部有也

延長四年七月九日冲記曰

去月廿三日式部有長首試判  
文其判及弟者三人登首記  
曰康保二年十月廿三日行幸  
朱雀院冲題於苑人不被行  
系葉共舟輕 勤七言 澧陵冰







進士よりさるる方略乃

宣言くくわぬ

放<sup>抄</sup>鳴乃作文より中略の人

とかよきぬあよわりの詩を

作らざる也其故は自然の

法合なる所を以て用(唐)胡

みし進士を試みたるはあふ

まじりてこれをさるるふを

つとむ也

春言轉

花葉乃(心)

花葉乃(心)

心酔するもうぬふ心

くくすの心(心)

とるは心言物と昔の花葉

乃母よこしぬとももこれ

一に相違(帝)るもく(心)存生

さるる心(心)もや

あいの心(心)も

今日(心)行(心)なり(心)も(心)も(心)も

心(心)なり(心)も(心)也



師乃みて 當兵るべき也

いふくいと吹はくくく

世も病みぬか也とぬえあ

やまも美しぬかあり昔の

礼業はほくくくくく

病みぬか也

字くくくくく

御早下乃の製也昔より

くくくくくくくく

の政道ありやん昔も昔

くくくくくくくく

業所くくくく 業もす

不也業は乃れくく

以前よりくく

李都王記曰天曆二年三月

九日朱雀院行幸歸徳之間業

所頗遠弦音不分明詔右大

臣云操弦者近候宜欵右大

養之上皇令曰是書寮御

琴式以和琴余琴右東園

琵琶 高







日中より一のむかし  
におもひまはしめ勝也

二宮におもひ まよふ心  
高き女院なるまよふ  
出さる也

いふらく 大船に朝也

いふらく 冷泉院に朝なり

桐臺帝后宮に女院なる

る一

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて

くみえしむ行幸ありて







作文ハ詩也  
不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>詞也

了<sup>レ</sup>礼記<sup>ハ</sup>王制<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>大業<sup>ハ</sup>正論<sup>ニ</sup>造<sup>ル</sup>  
士之秀者<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>告<sup>ス</sup>于<sup>テ</sup>王<sup>ニ</sup>練<sup>テ</sup>諸<sup>ノ</sup>  
司馬曰<sup>ク</sup>進士<sup>ハ</sup>注曰<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>進<sup>ス</sup>受<sup>ル</sup>  
爵祿者也

聖武天皇<sup>ノ</sup>神龜<sup>ノ</sup>年<sup>ニ</sup>始<sup>メ</sup>進<sup>ス</sup>  
士<sup>ノ</sup>試<sup>ム</sup> 帝王系用

儒家より出<sup>ル</sup>る人ハ秀才<sup>ト</sup>  
秀才より出<sup>ル</sup>る也進士ハ諸<sup>ノ</sup>書

より出<sup>ル</sup>る士也  
今<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>七  
横入也然<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>進士<sup>ト</sup>より出<sup>ル</sup>る也  
是<sup>レ</sup>所謂<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>人

其内一人ハ夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>也  
秋<sup>ノ</sup>行<sup>ル</sup>る<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>に

京官除目也春<sup>ノ</sup>行<sup>ル</sup>る<sup>ノ</sup>除目<sup>ト</sup>  
ハあり<sup>テ</sup>大<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>秋<sup>ノ</sup>行<sup>ル</sup>る<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>は  
つ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>也

正躬 葛野親房 弘仁七年補  
文章生 天長八年十月言



任侍從源清平 是忠親王男

延在二年九月文三年生七年

九月廿日侍從源保光 代明親王男

天曆四年十二月廿日奉文

三年生試同五年遂及第

十年正月一日侍從

くさくさ

叙爵也五位也

か乃人の 也再初也

大般之何なるもすすしと

こりこり 東院弁

さもた人さともつて一お

よすすもんと也

六条京く

ひもふれよも也

よふらと 六条院四面所

乃中に作れらる也

ア うほふれ物 紀伊守

ろ乃郡も神さしあふね

相よの長者吹よの濱乃



もろりに四面八町のまら  
子慈壇獲芳くらかい  
つゝもあゝと云木とも  
枝木とて金銀瑠璃  
東礫石垣のには殿を伴  
里をわけて東陣のま  
春乃山南の陣れやまは  
あのみけ西乃陣のま  
秋乃林少よに松乃林四面  
をとりうらまはるまの

すたをまにせよと模するん  
あまのけし 源は深也  
武乃宮 紫上又宮也  
御祭乃り 又又五十祭  
乃西宮に紫上用意の也  
りゝゝゝの意のり  
古き院よりよおはれり  
これいふ也  
とあまのけし乃経営の事也  
あまのけし 紫乃事也



人はいそを 此と也

らむ。其後にも 此後也

ひるうへ 死するは此

上と也

つとあふいそを初

すよはらうらういそは

つねあふいそは

にあり

あまたうへ

源はあふいそは中子

まはらむもは

つたうらくおは

わうは 此上継母也

わうにするまの

公よあるは

女御 王女御

乃小方は腹也

とらうらく

八月より 漢氏世

ひはらむ



六条の長不田流也仍様好  
乃不也

源出此流所方

字と一は 乳散也

いふいふもらゝ 明石也

山乃おまをびあゝ

あつし 春秋めらぬ

まににわら

みるに 異方也其上也

春乃景氣は作也

とにしよ 此是木のこゝを

一海の出る

いゝゝ 海也

くま 昔丹也杜丹の類

ひん 砂のこ 良町の東

西に一場致し作りぬ

これえんちる 母の

あり明る 明るは母

いふ乃は

時正なれよ記り







何えりて、紫と紅のりし  
と首略一紙なりこれと書  
一紙をて中文字より書  
一紙をて所を記也

此の字は乃、昔よりして  
ふもらふもあつりこれ  
と申乃あつりてすれども也  
こどもらへく 中宮の御  
各乃隔也あつりて  
廊ありとおほし也

宮の御主人 中宮乃御前也  
こゝろは 紫と紅也  
あつりてあつりてあつりて  
こゝろは 紫と紅也  
限らば先は紅也  
紫苑 而蕨芳 裏青  
のさしこゝろはあつりて  
あつりてあつりてあつりて  
みい書女乃らる也  
らるる 此 中宮の御前也



しるしをばしるし

学問の道にまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふは

まよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふはまよふは

まよふはまよふは



えきあめ きくあめあはれ  
いんせきあめあはれ  
二造花乃情也  
かくとあつら 雲上乃  
わくあめあはれ  
其感一也  
花のこもあはれ  
源出乃助言一也  
何とあはれ 退也  
いんせきあはれ

花とあはれ  
いんせきあはれ  
始つ也  
大井乃也  
明也  
花とあはれ  
七娘乃あはれ  
いんせきあはれ



